

三月総評

立花開

憎しみで一人前になるポプラ

合川秋穂 京都府

数十年から百年ほどで老木になり、人間と同じくらしいの寿命を生きるポプラ。木が抱く「憎しみ」とは何だろう。きっとどの生き物も幸せの感情だけで生きていくことなんてできない。ポプラを眺める主体もまたその一人。長く生きるほどに、感情は割り切れず、憎しみながら愛することもある。

地球の展開図をかいて

その中心にあなたを置いた

広田 土 大阪府

球体の展開図は“舟型多円錐図法”と“正十二面体”とがあるらしい。地球の「展開図」にふさわしいのはなんとなく前者な気がするけれど、作者が思い浮かべたのはどちらだろうか。創造主のような気持ちで「あなた」に触れる。静寂を感じる作品。紙にペンが擦れる音と、主体の鼓動だけが響く。

目を閉じてハグしないで

肌は孤独を浮き彫りにする

小沢旭 山梨県

目を閉じることで愛を感じると言う言葉はよく聞かすが、相手が見えないことで、「肌」という絶対に入り込めない領域を感じ取ってしまう。私たちの輪郭は「孤独」であったのだ。“抱きしめないで”ではなく「ハグしないで」とウエットになりすぎない言葉を選ぶ個性が良いと感じた。

オパールになりたいような冬の蜂

李いう子 佐賀県

飛行している蜂はきらきらしている。高速で動く羽根に光が反射しているからだが、光りながら飛んでいるたくさんの蜂のなかの何匹かはオパールになりたいからなのかもしれない。そう思うと読み手の心もきらきらとしてくる。蜂の小さな夢。「雨音に瞬きをするスイートピー／春の海一人のための降車ボタン／桜咲くたまたま花として群れて」など、今月も良作が多かった。

春の口

チョコパイ食べた

歌つたり

山本先生

東京都

季節が移り替わるのと共に、形は変わらなくても口や目、指先などの心が変化していく。明るくて陽気な「春の口」は、「チョコパイ」を食べたい。固有名詞によって焦点をぐっと絞る。口元にチョコを付けながら歌つたりもするのだろう。

桜しか咲かない国の奨学金

にしざわゆうと

福井県

「桜しか咲かない国」は地球にはないのだけれど、もしあるならば随分と怖い国だ。春に満開の桜で埋め尽くされるのはさぞ壮観だろうが、散ったあとに用意されているものはなにもない。一瞬の眩さや豊かさの裏側にはそれ以上に濃い影が生まれるもの。

これが恋ではない理由を滔々と

述べて急行二本見送る

汐見りら

東京都

タイミングだったり環境だったり、少しずつずれていって恋にはいたらなかったものたち。過去のものとなれば少しの胸の痛みも味わえるものだけれど。急行を二本見送るほど、止めどなく言葉が溢れてくるのは、もう好きということ。話し続ける「理由」の裏側にそれ以上の恋をする理由が溢れている。

春の星ただのガラスのようにビル

有野

水都

東京都

柔らかなく粒子が細かい春の光が物の凹凸を埋めていく。なめらかに光で覆われたビルは「ただのガラス」のように見えた。機能を失って美しさしか意味を持たない存在。初句は春を迎えた地球のことだが、春光を浴び輝くガラスの箱が立ち並ぶだけの美しい惑星があつてほしいと思ってしまう。

濡れたアスファルト

白い光が弾けた

うつむく人だけの花火よ

母が言う帰り道

頼田 昂 神奈川県

「うつむく人」への慰めのようにも、強烈な差別的なまなざしのようにも見える。「母」はおそらく長く「うつむく人」として生きてきたのだろう。言葉に同情と侮蔑が混ざる。それでも、そう生きてきた人にだけ見られる「花火」があるのだ。空に上がる花火のように鮮やかな色を選ばない、白だけの、光そのもののような「花火」が。

骨だけになったら

キスしてあげられる

ただありがとう、

さようならって

花やしき 東京都

生きている間に果たせないものに意味はあるのか。夢や他者への想いの成就など、私たちは“今”への報酬を求める。しかし主体が求めるものは、肉や血が付着している“今”では叶わない。「骨だけに」なったあと、相手の意志の確認ができなくなったあとにキスをして別れたい。自分のためだけに叶えたい、透明な他者への想い。